

Newsletter

2015.11.12

立教大学全学共通
カリキュラム運営センター

“学士課程統合カリキュラム (RIKKYO Learning Style)” と “全カリ3rd ステージ”を語る

—全カリ『ニュースレター』特別座談会—

参加者 吉岡 知哉（総長／法学部教授）
塚本 伸一（副総長（教学運営・キャンパス連携担当）／現代心理学部教授）
西原 廉太（文学部長／文学部教授）
佐々木一也（全学共通カリキュラム運営センター部長／文学部教授）

○佐々木 2016年度から“学士課程統合カリキュラム”あらため、“RIKKYO Learning Style”が動き出します。学部と全カリの連携・協力関係はより密接になるだろうと思っています。しかしながら、次期カリキュラムや運営体制のイメージが学内に十分浸透していないという懸念も見受けられます。今回、準備段階から関わってこられた先生方にお考えやご意見をいま一度伺って、特に全学共通科目の準備を進める全カリの来年度に向けてのジャンプ台にしようと考え、特別座談会と銘打って企画しました。

なお、“学士課程統合カリキュラム”は一般名であって、“RIKKYO Learning Style”が立教大学固有の呼び方としてふさわしいと思いますが、本座談会では、適宜、使い分けることにします。進行は、全カリ部長の佐々木が務めさせていただきます。

それではまず、そもそもの学士課程統合カリキュラムの考え方、そして今後の全カリとの関係にどのようなイメージを持っておられるのか、吉岡先生、塚本先生、西原先生の順にお話いただけますでしょうか。

1. 「学士課程統合カリキュラム」とは

○吉岡 学士課程統合カリキュラムの基本的な考え方は、わりあい早い時期から表明していたつもりです。学部と全カリの関係を一度見直し、リベラル・アーツという視点から組み直したいという考えは、総長に就任する以前からありました。そのきっかけのひとつは、35年前に法学部の助手に着任して担当した「基礎文献講読」という、教員と（当時の）助手がペアで週2回、夏休みも合宿をするとてもハードなチュートリアルシステムを取り入れた1年次教育でした。教える側として面白かったし、また、学生たちが生き生きと変わっていく姿に立ち

会うようで、1年次を中心に学生をしっかり丁寧に教える必要性を感じる経験でした。

それから数年後、全カリの立ち上げに主に総合の方で関わりました。本学のリベラル・アーツの伝統をどのように継承するか、また全学共通カリキュラムというシステムをどのように動かすのか、専門とどうい

関わりを持つべきなのか、さまざまな観点から議論した記憶があります。そして全カリが動き出して20年を経るなかで、全カリが昔の一般教育化していくという意見はあって、大学における教養教育が全カリ立ち上げ時の理念や、そもそものリベラル・アーツの伝統とマッチしているのか、考え直す必要性を感じてきました。

一方で学生は、必修と必修の空いた時間に全カリを入れる、就職活動のために3年次までに卒業要件単位を取り終える、アルバイトのために時間を捻出する、という実態があって、学生生活全体の問題としてカリキュラムを再定義し、特にそのなかで全カリがどういう位置づけになるのか、やはり考え直さなければならない時期だろうと思っていました。学生にとってみれば、アルバイトやボランティア、そして留学など授業以外の活動を含めて人間的に成長するのだから、カリキュラムの都合でそれを分けるということの意味自体を今一度考えるべきだろう、という気持ちを持っていたのです。具体的な検討を始めると全カリについてさまざまな論点が出てきて、ともかくまず学生を4年間でどう育てるのか、ここが議論の出発点になったわけです。その趣旨は、後の学士課程統合カリキュラム検討委員会で大いに議論されたと思



吉岡 知哉

目次

“学士課程統合カリキュラム (RIKKYO Learning Style)” と “全カリ3rd ステージ” を語る

—全カリ『ニュースレター』特別座談会— …… 吉岡知哉／塚本伸一／西原廉太／佐々木一也 (1～9)
2015年度全学共通カリキュラム運営センター名簿、シンポジウム告知 …… (10)

います。今般まとまりつつある学士課程統合カリキュラム (RIKKYO Learning style) が、最終的な解なのかは分かりませんが、今後も継続して考えなくてはならないことだろうと認識しています。そのような全学的な議論を経て、全学で立教大学の学生を4年間で育てるという視点が、少なくとも制度的に担保されたことの意味はとも大きいと思っています。

○佐々木 ありがとうございます。引き続き、塚本先生お願いいたします。

○塚本 「専門教育」と「教養教育」に仮に理想型があるとして、今回の学士課程統合カリキュラムが、それを実現しているか、最善のあり方なのかどうかは、考えてみる必要があるのではないのでしょうか。



塚本 伸一

先ほど吉岡先生がおっしゃったことと関係するのですが、いまの学生をどう育てていくのか、昨今の学生状況を捉えてみると、学士課程統合カリキュラムという選択は、よい解のひとつではなかろうかと思っています。大学進学率が50%を超えたユニバーサル段階と評されるような現在の大学では、そもそも圧倒的に学生の質が変わってきている気がします。専門教育として、教養教育として、ということよりも、読めない、書けない、考えられない学生をどう教育するのかに、視点も変わってきていると感じています。ひと昔前の専門教育では、体系の根幹だけを抜き出して教えていましたが、今の学生はこれに対応することはむづかしいのではないのでしょうか。もっと踏み込むと、なぜ学ぶのか、どのように学ぶのか、といった学び自体を問うレベルのメタ知識、メタスキルをまずは獲得させるような手続きをとらないことには、専門教育はそもそも成り立たなくなってきたのではないかと思います。このようなことを考えてみると、現在の専門教育が学生の質的な変化を取り入れながら変わるということは、よいことか否かは別として、教養的な教育との境界線が曖昧になってきているということの意味しているのではないのでしょうか。しかも、このことは学問そのものの原理によって起きているのではなく、学生の質の変化によるものです。

いわばカリキュラムの統合が、変化した学生たちの現状によって必然になっているのです。このような現実を踏まえるなら、この学士課程統合カリキュラムに依拠する教養教育の改革、専門教育の改革は最適解なのだと思います。

○佐々木 ありがとうございます。それでは、西原先生お願いいたします。

○西原 少し振り返りをしてみたいと思います。学士課程統合カリキュラムの検討は、本学がこれまで行ってき

た一連の教育改革、教学改革の延長線にあると位置づけられると理解しています。2007年に教育改革推進会議が発足し、2009年にいわゆる3方針が策定されます。これに呼応するかたちで、全カリの総合科目を改革するための議論が積み重ねられていくわけです。具体的には私が座長を務めさせていただいたものでありますが、2008年1月31日付で出された「2010年度全カリ総合教育検討グループ答申」(いわゆる第1次西原答申)があり、学士課程における学位水準を意識しながら全カリ総合をどう位置づけるのか検討しています。この答申ではタイトルにあるとおり、当初の議論でこそ全カリ総合をどうするのかというものでしたが、しかしそれは、総合科目だけを切り出してもダメであって、学士課程全体を論じないと無理であるという結論に至っているわけです。したがって、2008年12月18日付で出された「学士課程教育検討グループ答申」(いわゆる第2次西原答申)へと変わっていくこととなります。そこでは、1997年に発足した全カリの理念をまず確認しているわけです。全カリの基本的な理念をベースにしながら次期全カリ総合のカリキュラム改編を検討した結果、2010年3月4日の全カリ委員会において、「全学共通カリキュラム総合教育科目2012年度カリキュラム改革案」を全カリ運営センターが出すに至りました。この改革案では、2012年度からの総合科目の見直しに当たり、学生の能力育成に視点を置いたカリキュラム編成、リベラル・アーツ教育の充実、そして学部と全カリの教育連携の具体化に力点が置かれています。このような全カリについての議論の積み重ねの流れで、学士課程統合カリキュラムの検討が始まっていることは疑いようがありません。

ですから、この流れを踏まえて学士課程教育、学士課程統合カリキュラムの背景を論じるのがふさわしいと思うのです。そして全カリのこのような議論の積み重ねこそ、本学がリベラル・アーツを体現しようとしてきた証でもあると理解をしています。ただし、全カリのスタート当初から全カリの理念が実現できていたかということ、直ぐにはできなかったのだろうと思っています。旧一般教育部の階層や全カリ移行後に分属のような教員形態が生じるなど、まさに“全カリ1stステージ”では教員の意識の問題もあってむづかしい部分が多かったのではないのでしょうか。学部教員としての意識からすると、例えば文学部の所属であれば文学部の教員であって全カリの教員ではありません。しかし一方で、理念的には全カリは全ての教員で担うということになっています。この理念はきわめて大事なものです。特定の教員が全カリを担当するのではないのですが、しかし担当ルール(いわゆる専任担当ルール)をつくらなければならなくて、この担当ルールは少しの変動でも大騒ぎになるという代物だったりします。全カリを担当したくないという意見も多かれ少なかれ教員の間で聞かれることがあります。このような状況で果たして全ての教員で担っていることになるのでしょうか。一方で学生の意識としては、全カリはなるべく1年次の早い段階で修得してしまいたいという履修傾向があります。これは「学生による授業評価アンケート」などからもはっきりしています。しかもできるだけ単位を取りやすそうな科目を選ぶことを優先

し、自分の興味関心にあわせて4年間を見越した履修計画を立てるような理念とは、だいぶ距離があります。とにかく1年次の余っている時間に取りやすい科目を取れるだけ履修する動向が目立つとって過言ではないわけです。もちろんそういう履修動向を示す学生ばかりではないのですが、やはり全体的には、全カリは時間割を埋めるように履修する傾向が強いと思います。これはとても残念なことで、本学の特色ある教育の全カリがあまりにももったいないことになってしまっています。

そこで全カリの初期の理念をいま一度確認したうえで、あらためてそれを体現し、履修要項は学部（専門）と全カリ（教養）と2つのボックスに分かれているのではなく、卒業要件単位は全て等しい重みと理解され、どの科目も大事なのだとカリキュラム上デザインしたものが、まさに学士課程統合カリキュラムというわけです。このことは教員側にとっても同様の意味を持っていて、学部、全カリ、どちらの科目の意義も大事に捉えることにつながります。主として全カリが開講する「学びの精神」と学部が開講する「学びの技法」を1年次春学期に開講していて、これを“立教ファーストタームプログラム”と称しています。このプログラムの仕掛けは、実は学生にも教員にも意義があります。全カリが用意する「学びの精神」では、リアクションペーパーや小レポートを頻繁に課し、筆記試験を必須としています。1年次春学期にハードな勉強をさせて、大学での学びについてきちんとした導入を促します。このファーストタームの学びでは、学生はもちろんのこと実は教える側の教員も全カリ科目やそもそも全カリの意義について学び、ファーストタームでやるべきことは何なのか、ともに考えることにつながると考えています。“立教ファーストタームプログラム”とは、全カリ中心の「学びの精神」と学部中心の「学びの技法」がセットになっている、まさに統合カリキュラムなのです。科目を担当する教員は、4年間同じテンションで授業を行うことはむづかしいですが、せめて1年次春学期には、学生も教員もお互いインテンシブに学び合うような機会を持ってもらうことになりま。まさしく学士課程統合カリキュラムであって、2012年度の総合科目のカリキュラム改編に至る一連の全カリ改革の流れと成果を受けて、更に学士課程統合カリキュラムという形で4次にわたって検討委員会を重ねてきた結果のひとつであろうと思うのです。

第2次学士課程統合カリキュラム検討委員会の報告では、「全学部の教職員の経験と知見を結集しながら練り上げていく教育改革運動として、この学士課程統合カリキュラムを位置づけたい。学士課程統合カリキュラムの基本目的は、本学が一貫して目標としてきた『専門性に立つ教養人の育成』のために学生の視点に立って全カリ、専門、そして正課外を結合した教育を実現することにある」という確認をしています。これはとても大切なコンセンサスだろうと思っています。やはり我々にとってみると教育改革運動なのです。今回の座談会で強調しておきたいことは、教員と職員の経験と知見を結集して練り上げていく教育改革運動として、この学士課程統合カリキュラムが位置づけられているということです。単にカリキュラムをいじり、それがどう変わったのか、と

いうことではなくて、教員も職員もそれぞれと一緒に、専門、全カリ、正課外を結集して練り上げていく教職協働の体現でもあるのです。だからこそ、塚本先生がおっしゃるように、これでよいのかと常に自己変革をしていかなければならない、点検をしつつよりよいものに改革し続けていく必要があるのだと感じています。ゆえに、今般の学士課程統合カリキュラムのスタートは、何かができあがったというわけではなくて、ある意味でまだプロセスだと思っています。これからも引き続き行われる教育改革運動として取り組む、そういうつもりでいます。

○佐々木 ありがとうございます。

これまでの学士課程統合カリキュラム検討の経緯に対する評価などをお話いただきました。今回の改革について私自身、そもそも大学教員という独特の文化を持った人たちが社会と密接につながる学生とどのように接することがよいのか、そういうことが強く問われる社会状況を踏まえていると思います。そのなかで今回、本学が打ち出した学士課程統合カリキュラムという考え方、そして密接に関連する全学共通カリキュラム（特に総合科目）の大改編は、さまざまな現況にマッチした動きではないかと思っています。もちろん国の政策誘導を始め、大学教育の欧米先進事例、またユニバーサル化したと言われる学生を自由に勉強させるよりも、むしろ縛って尻を叩いて勉強させるアメリカで磨かれた手法の流入など、学士課程教育を意識した取り組みは大学界全体に広がり始めていることは事実です。しかし今回、本学が打ち出す学士課程統合カリキュラムと全カリの改革は、必ずしもそのような流れに乗っているものではないと考えています。それは、西原先生がおっしゃったように今回の改革が教職員をあげての精神的な教育改革運動ということからも明らかです。

日本の新制大学の多くは旧制の専門学校です。専門にはいろいろな意味合いが社会的にありますから、職業につながるという意味もあります。もともとモデルにしたドイツの大学には職業教育という側面があり、ドクトールとかマギスターという学位は、その分野の親方の証のようなものになります。ドクトールがあることで専門的な威信の高い職業人として生きられるという側面がありました。日本も西洋の文物を取り入れるなかで、最初は学士という資格に同じようなスタイルが浸透してきて、それが社会的に重用されたのです。ところが戦後、果たして従来の学士を養成する教育は自律的、主体的に自分の責任で行動できる市民を育ててきたのかと、新たに問われることになったわけです。その反省にも依拠して、リベラル・エデュケーションという面を持つ一般教育が始まりました。高い専門性を持つ高度な職業人、あるいは国家に枢要な人材を育てるということから一歩距離を置き、個人として、社会の一員として、市民として有用な教育、リベラルな普遍的教育を行うという意味で一般教育が導入されたはずでした。しかし、それには大学のなかで異物感があって、1991年の大綱化につながりました。本学ではただ異物のカリキュラムをなくすというだけではなく、教員全体の意識の改革を目指したのです。

全ての教員で全カリを担うことは、ただ一般教育に代わる新しい教養教育カリキュラムが全学的に重要だということだけではなく、それぞれの教員は専門を教えつつ、同時にリベラルな人間とはどういうことか考えながら学生と切磋琢磨する場に存在しているのだと、全カリ立ち上げ時に訴えたのです。初代、全カリ部長を務めた寺崎昌男先生は、全カリを学部のカリキュラムだと思ってほしい、と各教授会を脚しながらおっしゃっていたことを覚えています。私を含めて全カリ立ち上げ時に関わった教員は、この『ニュースレター』などの媒体を使ってそのようなことを発信してきました。全カリ立ち上げ当初のこのような理念もあって、今日まで20年続いてきたのだろうと思います。ですから今般、我々が取り組んでいる学士課程統合カリキュラムは、まさに時代を先取りしたものであって、日本の大学、高等教育としては本来的に実現しなければならないものです。国策に沿って取り組んできたわけではなく、我々は自律的に大学における学問の活性化の道筋を見失うことなく、ずっと追求してきたのだと思います。

ですが、全カリ立ち上げから20年、ということになりますと、立ち上げ時を知っている教員は多くが交代していて、新しく着任した教員たちが分からないなりに手探りで、全カリってこういう風にするのかと見よう見まねで関わり、そのうちに慣れていくような状況になってきています。少しタガが緩んできていると言えなくもありません。このことも学士課程統合カリキュラムの一連の改革のなかで再確認され、さらに西原先生がおっしゃったように1年次春学期に「学びの精神」を担当することで、教員の全カリへの参画の主体的意識を高めることになろうと、個人的には期待しているところです。本来、大学教員には自身の専門性を何よりも大事にする文化があります。それだけではなく、学部によっても独自の学問文化があり、専門性を大事にする方法も異なっています。ですから、全学出動といっても文化も考え方もライフスタイルも違う異文化間での活動なわけで、なかなかむづかしいものです。学士課程統合カリキュラムが現在の全カリ科目を、全学共通科目という形態で、はじめて自学部のカリキュラムと思ってもらうきっかけになるのです。これはかつて寺崎先生がおっしゃったことを実現しようとするのだと思うのです。それが成功するためには、やはり、学部のカリキュラムにどのようなプラスの影響があるのか、あるいは教員自身にとってどういう利点があるのか、という視点、認識を持っていただきたいのです。同時に、全カリ教育は専門と別の教養教育という従来の二本立てをしなくなるわけで、単なる教養教育ではなくて、また単なる専門教育でもなくて、ひとつの統合されたカリキュラム、教育プログラムになるのです。

今まで教養教育と言われてきたものが意味も機能も、学生にとっての効果もドラスティックに変わることになります。そこで、従来の専門、また全カリが新たな Learning Style になった場合、どのような変化が期待できるのかお考えを伺ってみたいと思います。

2. 専門（学部）と教養（全カリ）の融合

○西原 全カリ立ち上げ時に目指された意識改革は、特に教員にとって影響が大きかったのではないかと思います。一方で、学生の目線に立ってこの全カリ導入は何だったのか考えてみますと、別の見方もあるのではないのでしょうか。大学に入学する際、もちろん高校では何を勉強したいのか考えさせられるわけで、ある程度明確に大学や学部を決めて入学することになります。つまり、大学入学の段階で専門性を選択して入った途端、勉強したい専門性とは異なる全カリという科目を取りなさい、と言われるわけです。誠実な学生であっても、これではやはり「やらされ感」と言ったらよいか、本来の自分自身の目的とは異なるものがそこにあって、仕方がないから取る、勉強するということになってしまうのです。これはある意味でごく自然な学生の行動パターンではないのでしょうか。確かに問題ですけれども、しかし、学生たちにとってはあくまで自然な全カリ科目選択の仕方なのです。そのように考えると、全カリもおそらく一般教育も、学生の目からすれば同じように見えたのではないのでしょうか。要するに、全カリになっても学生の行動パターンは、大綱化前と変わらなかったのではないかと思います。この部分はやはり、制度がうまく機能しなかったと言わざるを得ないでしょう。教員の側はしっかりと意識改革があって、専門性の延長上で、佐々木先生がおっしゃったように意識の変化はおそらくあったでしょう。しかしながら、履修する学生の行動が変わらなかったということが、やはり当初の全カリの理念がうまく機能してこなかったひとつの原因ではないかと思うのです。

○佐々木 全カリの立ち上げを検討するなかでは、4年次に特化した科目を置くべきだという考え方がありました。1年次は専門を勉強したくて入学してきたのだから、専門の入門に取り組み自分の選んだところの知識をしっかり身につけ、それをある程度、2年、3年と勉強を進める過程で自分なりの問題意識が隣接分野に内発的に出てくる、よって全カリは高学年でやるべきというように私も考えていました。このようなプランもあったものの、やはり学部のカリキュラムにそれを求めることは当時としてはできなかつたし、学生の意識からも現実的ではなかつたのだと思います。3年次になると、半分は就職活動で腰が浮いてくるわけです。さらに幅広く勉強しなければならないという問題意識は学生にありつつも、とても余裕がない状況でした。全カリはなるべく早く終えておきたい、このような意識の方が強かつたのです。

○吉岡 そういう意味では私も同じような考えを持っています。最初の2年間は一般教育ないしは教養教育をやり、それから専門という形式的な仕組みには懐疑的でした。そもそも大学進学者が少なかつた時代、旧制高校ではある種の教養教育が行われています。これはやや理想化した言い方ではありますが、本来的な教養教育であっ

たといえると思います。この部分が大学の入門講座つまり一般教育になったわけです。ですから大学に入学したばかりの学生は、人文科学、社会科学、自然科学、保健体育から興味がない科目であっても取らなければならないのです。実際に大綱化の少し前、法学部では学生から専門科目を1年次で開講してほしいという申し入れがありました。学生が主体的に申し入れてきたことで、それゆえに全カリができた後はそれとのペアの授業のような意味合いで、1年次に専門科目を置こうとしたわけです。法学部を選んだ学生が1年次にどういう勉強の組み立てをするのか本来は、教養科目とペアで考えていたはずでした。この入門科目が全カリとペアで動く、本来は学部と全カリのこのような組み合わせが望ましかったのです。実際には全カリ科目の多くは、他学部生向けに入門的にしなくてはならないという思い込みのようなものがあり、うまくは行っていなかったように思います。そういう意味では最初から一般教育や教養教育、入門とか、形式的な部分が残ってしまったわけです。専門を教える学部が、専門的な勉強を教養に結びつけていくような仕組みを誰もきちんと考えられなかったし、我々教員はそのノウハウを持っていなかったのです。本学を含めて現代の多くの大学では、専門教育を通じて専門家を輩出するのではなく、専門的な知識を持った一般の市民を育てるのです。全カリを立ち上げる時の議論ではこのような話題があって、特に教員の意識を変えながらやっていこうという流れもありました。これはすごく重要なことで、やはり“専門性に立つ教養人”の育成なのです。専門を入学時から学ぶことによって身につく専門性に立脚した本の読み方のようなスキルは、一般性のなかではなく専門教育が担うこととなります。そして、その専門性に依拠したスキルが持つ広がりや教養という形で身につける、その相互作用のなかで学生は伸びていくものだと思うのです。

○西原 “立教ファーストタームプログラム”が学士課程統合カリキュラムのひとつの特徴、中心であろうと思っています。それは結局、かつての一般教育のように初年次に教養の勉強をやらせる、つまり先祖返りですかという質問を受けることがあります。これは真逆であって、今回の改革できわめて大事な点は、学生の視点でカリキュラムが統合されること、つまり、分かりやすく言えば履修要項が1冊になることなのです。例えば、文学部キリスト教学科の学生なら文学部の履修要項のみになります。従来のように学部と全カリの履修要項を2冊持つ、ということはないわけですが、学生は最初から、文学部キリスト教学科なら文学部キリスト教学科のものしか見ない。そのなかにかつての全カリ部分が入っているわけですが、学生からすると1年次は最初から専門をやっているということになるのです。そういう



西原 廉太

意味では、まさに全てが専門で、そこには専門と教養の区別はないのです。これが大切な点であって、完全に1年次から全て専門を勉強するということなのです。しかし、この専門の最初の重要なところで、いわゆる学問とは何か、真理を探究するとはどういうことか、本物や一次資料に触れることの意味、批判的思考、などを身につけることを課しているのです。ステレオタイプや常識を問うとか、他者の存在への気づきや共感、伝える表現力を身につける、こういった要素もそれぞれのキリスト教学科の専門として学生は最初から学ぶことになるのです。これが文学部キリスト教学科における“立教ファーストタームプログラム”の一部ということなのです。ただ、科目を提供する側からすると、「学びの精神」にあたる大部分は、全ての学部で共通する科目として全カリが提供する全学共通科目、となります。しかし繰り返しますが、学生からするとこれはあくまで最初から、1年次から専門科目なのです。留意しなければなりません。私たち教職員はどうしても運営側に立ってしまうのですから、専門と全カリが分かれていて、とか、統合することでどう利益があるか、といった話題になってしまいます。この視点や発想はあくまでカリキュラムを運営する側の見方なのだとことをよく理解しておく必要が、教職員にはあろうと思います。

○塚本 西原先生がおっしゃっていることはそのとおりなのですが、ただちょっと誤解を与えるといけなと思うことがあります。今回の学士課程統合カリキュラムで全ての教養が専門に取り込まれた、全てが専門なのだと切り切ってしまうことは、形式的には学部の専門科目なので間違いではないのですが、全カリが提供している科目の内実は、やはり専門とは異なります。誤解がないようにしたいのは、従来の全カリ科目の全てが、内実として専門化して、したがって全カリ提供の意味合いがなくなるかのような認識に陥らないように留意する必要がありますということなのです。

○西原 あくまでも科目の扱う学問領域ではなくて、学部提供、全カリ提供を問わず、学生にとって全てが専門学部・学科の科目であるということが大事なことであって、そういう心構えで受講してもらいたい、という意味になります。

○塚本 専門が主で、全カリがないがしろになるような関係性ではなくなるわけです。対等な関係のなかで、例えば心理学の専門性をより拡大する、相対化して考えるためのツールとしてさまざまな教養科目がそこには存在していて、まさに全カリのねらいのように機能する可能性があります。この学士課程統合カリキュラムが対等合併なのかどうかは分かりませんが、専門科目そのものが質的に変容してきているともいえるので、やや言い過ぎかもしれませんが、今回のカリキュラム統合は、むしろ専門科目の教養化なのかもしれないと思っています。これの象徴が「グローバル教養副専攻」だと思います。グローバル教養副専攻を具体的に検討する過程で、当初のコンセプトとは多少の違いが出てきています。当初の

コンセプトは各学部で開講している専門科目を広く開放してもらい、国際化、グローバル化などの枠組みで束ねることによって副専攻化する構想でした。これはまさに専門科目を広く開いて教養科目として一群を構成するという考え方だったと思うのです。とするとやはり、専門科目の教養化という意味の象徴的な構想であったのではないかと考えるわけです。本来のねらいを学部科目で実現できるようになることはシステムとして優れたものであって、学生は自分自身の本来の目的意識を追求しつつ、さまざまな視点を獲得できることになります。ただ、そのなかでの専門性とは何なのか、今まで目指してきた専門性とは何なのか、もう一度立ち返って考えてみなければならないことではないかと思っています。

○吉岡 少し誤解を招く言い方かもしれませんが、我々が知っている範囲の学部の専門性というのは、少なくとも学部教育のレベルでは、きちんとした授業は教養教育だったと思うのです。本当の専門性は大学院で専門家を育てるなかでできるのです。法学部のような、大学の起源の時から職業性が高い学部であっても、本当の意味での専門家になっていく学生が多いわけではありません。そこでは判例を読むとか条文を読むという訓練をとおして、論理的に考える、過去を読み解く、それらを現在にどのように利用するのか考える、といった訓練をしていて、いわゆるリーガルマインドと呼ばれるものを身につけることが目標なのです。そして、リーガルマインドを身につけることは、まさに教養なのです。さらに教員の意識改革という意味で言うならば、今まで自分たちが教えていたことは専門で、一般教育や教養とは違うと思っていたこと自体がそもそもおかしかったのです。今回の統合は担当している専門科目をきちんと全体の知識のなかでもう一度自分自身が見直すとか、あるいは、それを人に教えるときにどういう意味を持っているのかということ、教員自身が考え直すということと結びつくと思うのです。ゆえに、学士課程統合カリキュラムの議論のなかで意識の変革が起り始めたわけで、このことはすごく重要なことだろうと思っています。

それからもう1点、一般教育部なり教養部の教員はある意味で、学生に専門学部のやっていることの道をちょっと踏み外させる、つまり、ここにこんなに面白い知の世界があるということ、あえて道を踏み外して教えるようなところがよかったと思っています。法学部の学生にここに面白い哲学の世界がある、文学の世界がある、というように誘惑する授業があったのです。極端に言うと誘惑して道を踏み外させる、知的な刺激を与えるような部分が一般教育にはあって、全カリにもやはりそういうものがあると思います。学生が成長するなかで専門とは違う道を歩んでいく、その違う部分をいかに残すかが重要なわけです。教育のなかでの異物性、専門のなかでの異物性、それをどういう形で残すのかは重要なことです。これがきれいに制度化されてしまった結果、それまで専門性という枠からすると枠外、周辺だったような部分が持っていた独自の力みみたいなものが失われないうにしなければならないと思うのです。

○塚本 カリキュラムが統合されて専門として提供されることと、そのなかの異質性が同質化されるということはまるっきり違うことで、学生を誘導するために学部のなかに両者を同時に並立的に開講することが必要なわけです。そのなかに異質性、異物性はしっかりと担保して、専門として履修する内容に対する鋭い視点が提供できるような、そういう異質性、異物性を持たないのでは統合する意味がないのだらうと思います。このことはすごく意識をして、我々が整えていかなければならないことだと考えています。

○西原 そこは大切ですね。批判的思考をリベラルな教育を通じて発展させるという、きわめて重要なポイントです。確かにそれが一体化したときに、何の批判性もなくなってしまうのでは意味がないわけです。今回の学士課程統合カリキュラムでは、あくまでも科目の提供側は分かれているということが重要です。学生から見れば一体化しているわけで、しかし提供側はきちんと分かれています、学部とは別の独立した組織体として全学共通カリキュラム運営センターは引き続き残るわけです。全カリが提供する「学びの精神」や「グローバル教養副専攻」など、学部とは異なる視点で引き続き責任を持って科目を提供し続けてくれれば、学部との間にいい意味での緊張感が担保されることになります。

○佐々木 全カリという場は全ての学部が自由に交流できる場であって、同時に知的緊張を感じる場であってほしいし、今までもそうだったと思っています。全カリに近づきたい教員と近づきたくない教員というのがいて、近づきたい教員は、その知的緊張を楽しむタイプです。このこと自体とても危うい側面を持って



佐々木一也

います。積み上げ型のカリキュラムは、整合的に次々と論理的必然性でつながっていて、要するに緊張なくつながることを理想としているわけです。ですが、大学で育てようという学生たちに対して、大学の学問というものは必ずしもそういうことを目指しているわけではありません。自ら知的見地を生みながらも、それを弁証法的に発展解消させ、そこからさらにまた新たな見識と緊張を生む、というような成長を望んでいます。

○吉岡 今、大学に公的に求められているのはツルンとした、きわめて合理的、効率的な人材形成です。入学試験からきちんと分別し、卒業までの過程で質保証をするわけです。卒業証書はあたかも品質保証書であるかのような言い方が公然とされることもあります。しかし実際の教育の現場ではそうはいきません。そのようにやろうとしてもうまくはいかないことが面白いところなのです。この学士課程統合カリキュラムで専門と全カリを統合しようと考えたとき、それこそベルトコンベアのよう

なプロセスで品質の良いものに保証書を付けて外に出していくことではむしろなくて、我々自身が想像できないような人間を育てていく、そういう創造的能力を開発していくことを目指したわけです。学生は入学時とは全く違う存在になっていって、卒業してからも変わっていくような素地をつくるのです。そのために教養教育があるのだし、一方で、専門の突出した専門性というのがあるし、専門の技法というものがあるのだらうと思うのです。

3. グローバル教養副専攻と全学共通科目

○佐々木 ここからはグローバル教養副専攻について、全カリの科目とのつながりを主に考えながらお話いただきたいと思います。私の個人的なイメージですが、今までの全カリ（特に総合科目）はランダムに履修されてしまうことが多々ありました。このグローバル教養副専攻は、全カリ科目を中心としたコースが用意されていて、総合系科目をベースとした“Arts & Science Course”と、言語系科目をベースとした“Language & Culture Course”を予定しています。特に総合科目の「多彩な学び」を中心に組み立てることができる“Arts & Science Course”では、あるまとまりをもって履修できる動機付けとなるようにと考えています。自分の専門性に依拠する関心、専門性をグローバルに活かすという視点から、所属学部の専門以外にも目が向くことを期待しています。このことが、自ずと「多彩な学び」の学習にもつながると、専門の学習があって、それと密接に有機的につながった形で横の学習ができ、しかもそれがグローバルな方向へ向いていくという三兎を追うようなプログラムを提供できることになるのです。この辺について、どのようなイメージを持っておられるでしょうか。

○塚本 先ほど吉岡先生がおっしゃった、ツルンとした、ノッペラボウな教育のありようは、ユニバーサル化した学生の力量を前提にしているような気がします。これまでの全カリでは学生自身が問題意識を持って何をどう履修すればよいか、意図的、意識的に選択していくことがきわめて重要です。それには学生の高い力量も必要になります。自分自身の能力が分かり、社会の動向が把握でき、今後がある程度予見できる、そういう力量を持った学生ではないとこちらの意図はなかなか実現できないのではないかと思います。学生が質的に変化してきている以上、そこにはやはり我々が手を差し伸べて、ある種の道筋を見せてあげないとならない部分もあって、限られた4年間の過ごし方の道筋を示すなど大学として取り組む必要性があると考えています。それが本来の大学教育なのかと言われると、またそこは大変むづかしいところではあります。いずれにしても、まとまりをつけて体系化されたグローバル教養副専攻という仕掛けは、現在の学生を中心に据えたカリキュラムとしてはきわめて適当で、優れたものになり得るといった感じがします。

○佐々木 グローバル教養副専攻を考えるにあたっては、言語の要素は欠かせないものです。立教大学として今後のグローバル教養副専攻を考えたときに、言語をどのように捉えていくことになりそうですでしょうか。

○吉岡 私が最初に学士課程統合カリキュラムを考えたとき、ひとつの核は言語だと思っていました。本来のリベラル・アーツ(自由七科)は7科目のうち3科目は文法、修辞、論理の言語関係科目です。つまるところ言語を通じて学び取るとはきわめて重要であって、言語の問題抜きには教養はあり得ないと考えています。英語にせよ、他の言語にせよ、4年間で、言語を学ぶことの意味を含めてしっかりと学んでもらいたいと思っています。

○佐々木 「多彩な学び」では日本語で日本について学ぶ科目（J科目）を新設し、一方で外国語による日本研究科目（F科目）も科目数を増やしています。F科目では、従来は特別外国人学生を主な履修者として開講していたためTOEICスコア700点以上を履修の要件としてある程度の英語力を求めていました。今回は、TOEICスコア550点程度を履修の要件とする講義形式のF科目を新設して、より多くの日本人学生（正規学部生）に英語を中心とした授業で日本のことを学ぶ機会を用意し、グローバル教養副専攻に組み入れようとしています。グローバル教養副専攻では海外体験が必須なものですから、何らかの形で海外に出るわけで、そこでは日本語以外の言語でさまざまなコミュニケーションを実践し、もちろん日本のことをたくさん発信してもらい、ある種のサバイバルを経験してきてもらうわけです。

○西原 英語力をつけるのはもちろん大事なのですが、それより大切なことは、むしろ英語で何を学び、何を語るのか、異質性に対して開かれた精神を持てるのか、ということです。關う道具の語学力ではなく、異質な考えを理解しようとする開かれた心とか、そういうものを持てる、そして何のために英語が必要なのか、何を語るのか、この部分が大切なのです。この部分をおろそかにしてしまうと、英語学校で英語スキルを磨けばよいという話になります。言語と総合に分かれているだけのカリキュラムでは、言語を学ぶ目的意識のようなものが見えにくくなりますが、このグローバル教養副専攻を活かすことで、ある程度テーマに基づいた語学力を、学生自身が主体的に鍛えることにつながるのです。何のための英語なのか、何を発信したいのか、そのためには英語が必要だということに学生自ら気づくのです。そういう意味では、グローバル教養副専攻で示されたテーマは、単に履修モデルということだけではありません。言語をどう学ぶのか、学生自身の学びのなかで問い続けることにつながる大きな意味を持っていると思うのです。

○吉岡 例えば第二言語としての英語をどこまで大学がやるべきなのか、さまざまな議論が常にあるわけです。大学で英語を授業に組み込む意味を考えると、ある種の道具として使えるようになるということに加えて、母語ではない言語を通じて思考する経験があるのではないか

と思うのです。これは異文化体験のベーシックな部分で、やはり大学でやるべきことです。ゆえに大学から英語の授業がなくなるようなことはあるべきでないと思っています。そして大学は、言語教育として第三言語、第四言語と、多くの言語に知見を持てるような環境を維持するべきであって、これはすごく重要なことです。話すことができるレベルではなくても、簡単なコミュニケーションができる、辞書を引いて文章を読める、言語についてこういう知的な訓練ができる場を大学は担保するべきです。

○西原 本学における多言語・複言語主義は引き続き守られなければならないと思いますし、そのことは学問の根幹に関わることです。何かの研究をしていて、海外にある一次資料を読むとき、その言語が分からないと読めないわけで、何のために語学を学ばなければならないのかという話につながるわけです。このことは、必ずしも英語だけではなくてあらゆる言語に通じるものです。

○佐々木 全カリでの言語教育は、今まで言語チームが一手に担ってきました。2016年度からは、総合チームが所管する科目として“多彩な文化とことばを垣間見る科目群”という愛称をつけた科目を「多彩な学び」で開講することになっています。「アジアの文化とことば」や「中東の文化とことば」といった科目名で、従来は全カリ言語で扱ってこなかった言語に依拠した講義系の新しいコンセプトの科目になります。例えば「アジアの文化とことば」では、2016年度はタガログ語からフィリピンの社会や文化などを考える科目を開講予定です。言語と密接に関連づいた講義系の総合科目という、まったく新しいコンセプトの導入になります。

○西原 こういうコンセプトの科目は、本当に大事に育ててもらいたいと思います。

○佐々木 この科目群は言語科目ではないので言語のトレーニングは行いません。あくまでも講義科目として、その言語が使われている地域の生活や文化、歴史なども絡めて、この地域ではこういう文字を使っていて、別の地域では文法が特殊で周りの地域と違うとか、翻ってその言語自体にも関心を持ってもらおうというものです。

○西原 社会的にも大学界的にも英語一辺倒の風潮が強くなってきています。もちろん英語はできたことに越したことはないのですが、やはり本学が大事にしたい徹底した多文化性・多言語性、複文化性・複言語主義、などは、本物のリベラル・アーツを目指し維持していく上で決定的に不可欠な要素です。これを保証する意味からしても、佐々木先生からご披露のあった“多彩な文化とことばを垣間見る科目群”というものはきわめて重要な枠組みではないでしょうか。

○佐々木 今まで学部と全カリを結びつけてくださる教員として、総合サポーターを各学部にはお願いしていました。もちろん学部長が全カリ委員会の委員でおられ

て、全カリのことに直接タッチしていますが、実務的な部分で密に全カリ事務室と連絡を取り合いながらカリキュラムをマネジメントする役を担っているのはサポーターの教員です。現在は総合チームに所属するサポーターになっていて、仕事としては総合科目関係に限定されています。これを今後、「全カリサポーター」に名称を変えて、主な仕事は従来どおり総合科目なのですが、先ほどの科目のような総合科目に入りきらないような言語に関わること、あるいは学部の要望を全カリに伝えるような役割をサポーターに担っていただけないかと考えています。例えば、“多彩な文化とことばを垣間見る科目群”の担当者を兼任講師の先生で調整する場合、アラビア語、イタリア語、トルコ語、タイ語、など、紹介いただけそうな学内の先生がけっこうおられるのです。そういう先生の情報や兼任講師の紹介などもサポーターにお願いできるとよいなと思っています。サポーターの仕事は今より少し広がるかもしれませんが、もともと学部によって量的な負担の濃淡もありますし、全体として負担増にならないように工夫します。2016年度からはこのような策も交えながら、学部と全カリの連携・協力関係を質的にも強化したいと考えています。

○西原 グローバル教養副専攻の仕組みは、言語と総合の枠を越えた全カリ全体の枠組みになっていて、これは画期的だと思っています。まさに“全カリ3rd ステージ”を象徴するものです。グローバル教養副専攻は2017年度から本格的に稼働し、今のところ必修ではない設計ですが、将来的には何らかの副専攻テーマを必ず修める仕組みにしてもよいのではないかと考えています。テーマは大学が示したモデルだけではなくて、学生自らが開発してもよいわけでしょう。自分の専門にプラスした学修、まさにメジャー、マイナーの関係でグローバル教養副専攻を活かしてもらいたいです。これはすごく可能性があって、例えば、「世界の芸術にふれてグローバルな感性を磨きたい」という学生は、そのテーマに合わせて、海外体験としてシスティーナ礼拝堂に行き、そのためにイタリア語を学ぶことになります。「多彩な学び」で開講の「キリスト教と美術」や先ほど話題に出た“多彩な文化とことばを垣間見る科目群”の「イタリアの文化とことば」も履修します。場合によってはキリスト教学科の専門科目を聴講するなど、学生の興味関心に合わせて自ら主体的に組み立てることができるわけです。まさに、学生主体の多様な学びのスタイルが始まるわけです。このように学びのスタイルに変革が起きれば、これは大きな教育改革となり、我々が目指している学士課程統合をある種体現するものになってくるのではないかと、そう期待をしています。

4. “全カリ3rd ステージ”、 そしてサロンとしての全カリへ

○佐々木 学士課程統合カリキュラムでは、特に「学びの精神」が重要と感じているのですが、学部や学内部局などに科目のアレンジをお願いするなかで、従来の古い

タイプの授業のやり方のイメージで捉えられていることが多いように思います。基礎的な知識を教えるとか、あるいはリレー講義でやろうとか、誤解と言いますか、その辺の理念は十分に浸透していないと感じています。

○西原 確かに「学びの精神」の理念が正確に伝わっていない部分はあると思います。説明が不足していることもありますし、今回の企画などとおして理解を深めていただくことが必要だと感じています。さらに言うと、「学びの精神」に限らず学士課程統合カリキュラムそのものを始め、「学びの精神」、「多彩な学び」、「スポーツ実習」を開講する運営組織としての新たな全学共通カリキュラム運営センターについても理解の浸透を図る必要性を感じます。

少し話題を変えますが、総合科目の数が多くないかという指摘がしばしばあります。特に総合科目のコマ削減を進めると、先ほどから話題のように専門と全カリを学生は一緒にカリキュラムとして見てはいるものの、緊張感を維持するためには総合科目の数はある程度を確保した方がよいと思っています。塚本先生がおっしゃったように、学士課程統合カリキュラムというものはある種の危険性をはらんでいて、統合されたからよいという楽観的な見方はよくないと私も感じています。文学部はカレッジ・オブ・アーツで、つまりリベラル・アーツそのものなので全カリとの差異が分かりづらい部分もあって留意しています。

○佐々木 各学部の先生方のなかに、サポーターをパイプ役として、統合されたカリキュラムだからこそ緊張感を維持した方がよいのだと真剣に考える人を育てることが必要になりそうです。

全カリ運営センターは今後、カリキュラムを運営する仕事はもちろんメインですが、それにも増して各学部の先生方が、長年全カリが培ってきた文化、土壌にしっかりと触れるチャンスを増やす仕事もしたいと考えています。2015年3月に刊行した『大学教育研究フォーラム』20号では、全カリ（事務室）のサロン化について書いていますし、“全カリ3rd ステージ”でこそ、いま一度、立ち上げ当時の全カリの理念を再確認しつつ教職員が集う場としての全カリにしたいし、そのこと自体が全学で担う学士課程統合カリキュラムの体現のひとつなのかも

しれない、そう思うのです。

○吉岡 最近、全カリのサロン化という表現をしばしばされることがあるように思います。ぜひ、実現してもらいたいと期待しています。

○塚本 佐々木先生からサポーターの業務が広がる可能性について言及がありましたが、統合ということによって学部教育全体の責任を全カリと共有しなければならないわけで、その意味では業務が広がるのは当然のことだと思います。まさにサロンとして、全学的な教育に緊張感を維持しつつマネジメントする、それが新たな全学共通カリキュラム運営センターというわけで、したがって学部教育全体の責任を全学でしっかりと持たなければならないということだと思います。

○西原 とすると、カリキュラムについて考える会議体設定の仕方もむつかしくなりそうです。今までは学部、全カリと、ある意味でお互いに手を入れないようにカリキュラム改編を重ねてきましたが、専門も全カリも全学で等しく教育責任を負っているとなるのですから、一緒に議論してカリキュラムをつくりあげることが肝要になるわけです。そういう意味からすると、そのパイプ役として期待されるサポーターは、そもそもサポーターという呼称がふさわしいのか検討が必要になるかもしれませんが、きわめて大切な働きになりそうです。各学部には、全カリサポーターのみならず、学部教員としてしっかり活躍し、かつ全カリについても理解が明い、そういう教員を育てる必要性がますます高まりそうです。

○佐々木 さて、そろそろ時間が迫ってまいりました。本日は2016年度から始まる“学士課程統合カリキュラム”、また“RIKKYO Learning Style”について、これまでの議論の経緯やそれぞれの先生がお感じになっているキーワードに基づいたお話をご披露いただきました。座談会のお話も踏まえ、全カリ運営センターでは引き続き2016年度に向けた準備に邁進したいと気持ちを新たにしています。本日は、誠にありがとうございました。

(2015年9月22日；池袋キャンパス ロイドホール5階

文学部長室にて)



2015年度 全学共通カリキュラム運営センター 名簿

2015年9月現在

〈全カリ委員会〉			
役職名	氏名	所属	
部長	佐々木 一也	文 文	
副部長	小泉 哲夫	理 物	
チームリーダー	新野 守広	異C 異C	言語チーム
	中島 俊克	済 済	総合チーム
運営センター委員	西原 廉太	文 キ	文学部長
	須永 徳武	済 済	経済学部長
	北本 俊二	理 物	理学部長
	松本 康	社 社	社会学部長
	川崎 修	法 政	法学部長
	毛谷村 英治	観 観	観光学部長
	浅井 春夫	福 福	コミュニティ福祉学部長
	石川 淳	営 営	経営学部長
	堀 耕治	現 心	現代心理学部長
	池田 伸子	異 異	異文化コミュニケーション学部長
	井川 充雄	社 メ	教務部長

〈言語教育研究室〉			
研究室名	氏名	所属	
英語	主任 森 聡美	異 異	
	Caprio, Mark E.	異 異	
	Cousins, Steven D.	異 異	
	Cunningham, Paul A.	異 異	
	河合 優子	異 異	
	川崎 晶子	異 異	
	小林 悦雄	異 異	
	Martin, Ron	異 異	
	師岡 淳也	異 異	
	灘 光洋子	異 異	
	佐竹 晶子	異 異	
	高橋 里美	異 異	
	高山 一郎 (秋学期から)	異 異	
	武田 珂代子	異 異	
山口 まり子	異 異		
山本 有香	異 異		
ドイツ語	主任 新野 守広	異 異	
フランス語	主任 中川 理	異 異	
	小倉 和子	異 異	
スペイン語	主任 佐藤 邦彦	異 異	
	飯島 みどり	異 異	
中国語	主任 谷野 典之	異 異	
	細井 尚子 (秋学期から)	異 異	
諸言語	主任 石坂 浩一	異 異	
	イ ヒャンジン (秋学期から)	異 異	
	新野 守広	異 異 ¹	

〈総合チームサポーター〉			
	氏名	所属	グループ ²
学部選出	水谷 隆之	文 日	人文学
	山田 康裕	済 会	社会科学
	横山 和弘	理 数	自然・情報
	砂川 浩慶	社 メ	社会科学
	林 美月子	法 法	社会科学
	千住 一	観 交	社会科学
	結城 俊哉	福 福	社会科学
	秋野 晶二	営 営	社会科学
	江川 隆男	現 映	人文学
	黒岩 三恵	異 異	人文学
総長任命	長島 忍	理 数	自然・情報
	石坂 浩一	異 異	社会科学
	安松 幹展	福 ス	スポーツ人間
	日高 聡太	現 映	スポーツ人間
	飯島 みどり	異 異	人文学

*2 サポートグループ
 人文学系サポートグループ
 社会科学系サポートグループ
 自然・情報科学系サポートグループ
 スポーツ人間科学系サポートグループ

〈言語教育科目構想・運営チーム〉			
役職名	氏名	所属	
リーダー	新野 守広	異 異	
メンバー	森 聡美	異 異	英語教育研究室主任
	新野 守広	異 異	ドイツ語教育研究室主任
	中川 理	異 異	フランス語教育研究室主任
	佐藤 邦彦	異 異	スペイン語教育研究室主任
	谷野 典之	異 異	中国語教育研究室主任
	石坂 浩一	異 異	諸言語教育研究室主任

*1 言語チームリーダーとの兼務

〈総合教育科目構想・運営チーム〉			
役職名	氏名	所属	
リーダー	中島 俊克	済 済	
メンバー	後藤 雅知	文 史	
	浅妻 章如	法 国	国ビ
	西山 志保	社 社	
	沼澤 秀雄	福 ス	
	小森 靖	理 数	

全カリニュースレター No.38	
印刷	2015.10.30
発行	2015.11.12
発行人	佐々木一也
編集人	小倉 和子、中島 俊克
発行所	立教大学 全学共通カリキュラム 運営センター
印刷	株式会社 白峰社

全カリシンポジウム開催のご案内

「知識の現場」で育てる教養とは

日時：2015年11月16日（月）
18:30～20:30

場所：池袋キャンパス太刀川記念館3階
多目的ホール

全学共通カリキュラムで開講する「グローバル・リーダーシップ・プログラム (GLP)」、「立教サービスラーニング (RSL)」は、アクティブラーニング手法を用いた能動的学修科目である。学生が「専門性に立つ教養人」となり、市民社会で活躍するためにはどのような力が必要なのか。本学の事例をGLPが掲げる「リーダーシップ」、RSLが掲げる「シティズンシップ」をキーワードとしながら紹介し、能動的学修の課題や展望について考える機会とする。